

## 呉昌碩「魯道人重定詩文潤格」をめぐつて

松 村 茂 樹

### はじめに

詩書画印四絶をもって「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩（一八四四―一九二七）は、辛亥革命（一九一一）後の六十八歳時、上海に移居し、上海芸林の中心的存在となった。

当時の上海は、南京条約（一八四二）による開港後、国際貿易港として栄え、経済的成功を収めた新興富裕層が、次なるステップとして、いわゆる文化人になろうとし、詩文書画といった旧文人的教養に関心を寄せていた。かくして上海には文人墨客が雲集し、自らの詩文書画を売ることになる。

そもそも、文人の詩文書画は、売ることを前提としていないが、彼らは価格表を掲げ、ビジネスライクに売った。その価格表を潤格という。

潤格は、自ら定める場合もあるが、多くの人は、師匠筋や有名な人に定めてもらっている。前述のように、上海芸林の中心的存在となっ

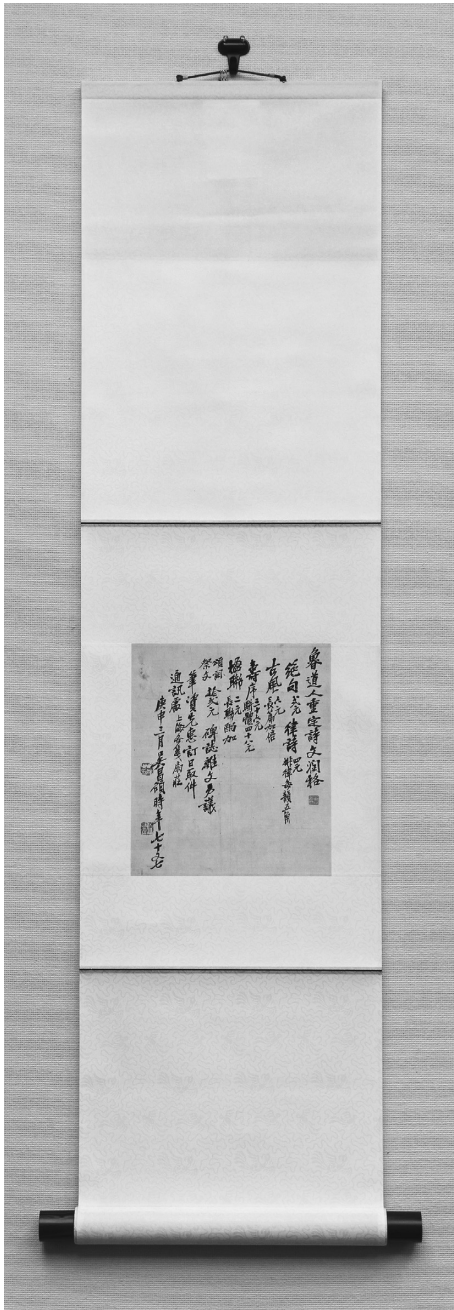
た呉昌碩も、弟子の王个簪や友人の王一亭などのために潤格を定めている。<sup>〔註1〕</sup>

ここに紹介するのは、呉昌碩が魯道人（生卒年未詳）のために定めた「魯道人重定詩文潤格」（大妻女子大学図書館蔵）である。詩書画印四絶とはいえ、呉昌碩は書画篆刻によって評価されており、詩文の評価は、少なくとも書画篆刻の評価には及ばない。よって、呉昌碩が定めた潤格の多くは書画篆刻に関するもので、詩文に関するものは、筆者は今のところこれしか知らない。

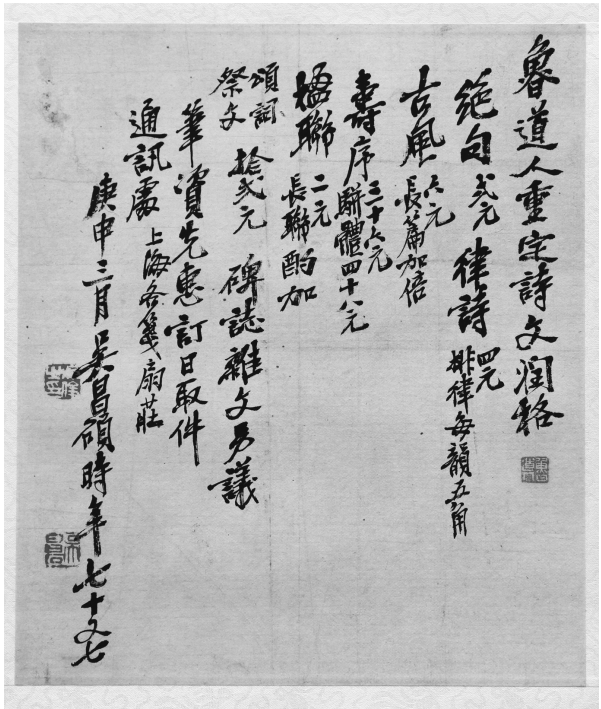
本稿では、呉昌碩が定めた、この稀少な潤格について、分析を加えてみたい。このことにより、呉昌碩の知られざる一面に照明をあてることができると思われる。

### 一、呉昌碩「魯道人重定詩文潤格」の内容

まずは、この潤格の内容を翻字し、日本語訳を付しておこう。



魯道人重字詩文潤格  
 絕句 六元 律詩 卅四元  
 古風 長篇加倍  
 壽序 卅六元 聯體 卅元  
 楹聯 二元 長聯 酌加  
 頌詞 拾元 碑誌 雜文 另議  
 祭文 拾元  
 筆資 先惠 訂日 取件  
 通訊處 上海各箋扇莊  
 庚申三月吳昌碩時年七十七



魯道人重字詩文潤格  
 絕句 六元 律詩 卅四元  
 古風 長篇加倍  
 壽序 卅六元 聯體 卅元  
 楹聯 二元 長聯 酌加  
 頌詞 拾元 碑誌 雜文 另議  
 祭文 拾元  
 筆資 先惠 訂日 取件  
 通訊處 上海各箋扇莊  
 庚申三月吳昌碩時年七十七

魯道人重定詩文潤格

絶句 貳元 律詩 四元 排律每韻五角

古風 六元 長篇加倍

寿序 三十六元 駢体四十八元

楹聯 二元 長聯酌加

頌詞 祭文 拾貳元 碑誌雜文另議

筆資先惠、訂日取件

通訊処 上海各箋扇莊

庚申三月、吳昌碩時年七十又七

〔魯道人重定詩文潤格〕

絶句 二元 律詩 四元 排律は每韻（二句毎に）五角

古風 六元 長篇は倍增

寿序 三十六元 駢体は四十八元

楹聯 二元 長聯は適宜追加



吳昌碩「魯道人重定詩文潤格」をめくって

頌詞 祭文 十二元 碑誌や雜文は別に相談

潤筆料は前払い、指定日に取りに来られたし

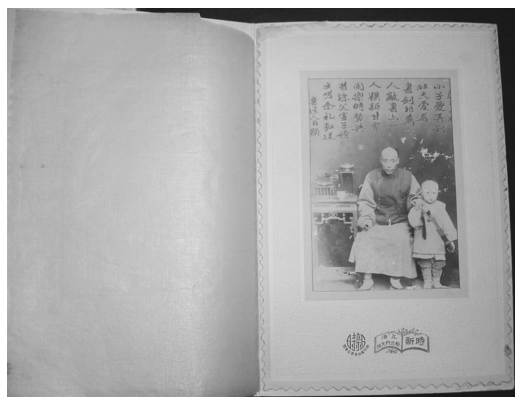
連絡所 上海の各書画文具店

庚申（一九二〇）三月（旧曆）、吳昌碩時に七十七歳

ちなみに、この年の元旦、吳昌碩が自身のために定めた「缶廬潤格」の「題詩跋」は、「每件三十兩」とあり、この魯道人に比べて、かなり高額であることがわかる。

## 二、魯道人の肖像写真と自題詩

この魯道人の一端を、「光緒庚子年魯道人提詩老照片」と題された肖像写真および自題詩から窺うことができる。光緒庚子年は、一九〇〇年にあたり、台紙から、上海の写真館で撮られたものであることがわかる。



自題詩を翻字する。

小子愛弄劍、丈夫愛看書。

劍非万人敵、書亦一人娛。

詎甘家団楽、時勢与昔殊。

父坐子傍立、嗟余礼数迂。

魯道人自題。

〔子供は劍を弄ぶのを愛し、大人は本を読むのを愛する。

劍は万人を敵にするものではなく、本もまた一人で娛しむものだ。

どうして家族団楽に甘んじられよう、時勢は昔とは違うのだから。

父は坐り子は傍らに立つ、ああ私は礼儀にうとい。

魯道人自題。〕

清末の不安定な時期に生きる読書人の姿が窺える。この独得の風貌と、趙之謙に通じる筆跡も見逃せない。

### 三、二人の接点

魯道人と呉昌碩との関係はどのようなものであったのであろうか。

管見の及ぶ限りでは、呉昌碩が関与していた書画篆刻界関係の資料に、魯道人の名は見当らない。そこで、呉昌碩が詩人として参加していた

詩会関係の資料に目を転じると、周夢坡『晨風廬唱和統集』十二卷（一九二八刊／筆者は卷一、二、七、八の複印を有するのみ）卷一「姓氏録」に、

襄平徐子昇魯山別署魯道人

とあり、この徐子昇こそが、魯道人の本名であり、魯山が字であることがわかった。

彼の名が見える『晨風廬唱和統集』は、編者の周夢坡（一八六四—一九三三）が友人達と唱和した詩を集めた『晨風廬唱和詩存』十卷（一九一七刊／筆者は卷一〜八の複印を有するのみ）の統編である。

周夢坡は、名を慶雲、字を景星といい、湘船、夢坡と号し、室名を

晨風廬という。浙江呉興南潯の人。塩商の家に生まれ、辛亥革命後は上海に移住して、天章絲織廠、長興鉄廠、浙江興業銀行などの経営に携わり、実業家として活躍すると共に、消寒雅集（消寒集）、淞浜吟社（淞社）などの詩会を主催するなど、文化人としても知られた。

この周夢坡が主宰するいわゆる「晨風廬唱和集団」の主要成員に呉昌碩がおり、そしてそこに魯道人も加わっていたのである。つまり、魯道人は、詩人として「晨風廬唱和集団」に加わり、詩人として主要成員となっていた呉昌碩に出会い、詩文の潤格を定めてもらったのであろう。

### 四、出会いの時期

魯道人はいつごろ呉昌碩と出会ったのであろうか。前出『晨風廬唱和詩存』の卷八「姓氏録」に、

襄平徐子昇魯山

とあり、「姓氏録」の注に、「已見前者不録（すでに前に見える者は録さない）」とあることから、魯道人の名と詩は、卷八にはじめて見えることになる。『晨風廬唱和詩存』は、壬子（一九一二）から丙辰（一九一六）にかけて唱和された詩が収められており、卷八に見える魯道人の詩は、「丙辰清明節、恰逢三月三日、晨風廬主人特假愚園、讌客修禊事也、即席賦詩、用杜少陵麗人行韻、頗為人所伝誦、越日折柬示余、且索和焉、卒爾構此、以応雅令」詩のみである。つまり、丙辰の三月三日（旧暦）、周夢坡が愚園で催した詩会で賦した詩が翌日届けられ、それに和したという詩で、魯道人は、この頃、「晨風廬唱和集団」に加わったのであろう。

そして、丁巳（一九一七）から丙寅（一九二六）に唱和された詩が収められている『晨風廬唱和統集』には、丁巳の立春に作られた、卷一の「立春節、承晨風廬主人折柬招飲、余適以事他出、翌日走謝、始知是夕、在座皆属詩人、開筵坐花、飛觴醉月、頗極一時韻事、感而賦

此、「聊以遺懷」詩を皮切りに、筆者が有する複印の範囲内においても、魯道人徐子昇の詩が少なからず見える。そして、たとえば巻八の周慶雲（夢坡）「癸亥元日書懷、録請詩家正和」詩などには、魯道人、呉昌碩共に和している。

### 五、呉昌碩が魯道人に与えた詩と書

こうして、魯道人は、「晨風廬唱和集團」の成員として呉昌碩と交わることになり、庚申（一九二〇）三月（旧曆）、この「魯道人重定詩文潤格」を書き与えてもらったのである。これは「重定」されたもので、これ以前に定められた潤格があつたはずであるが、未詳である。

この前後に、呉昌碩が魯道人に与えた詩と書があるので、年代順に紹介しておこう。まず、戊午（一九一八）に作られた、「上巳徐園和魯山」詩（『缶廬詩』巻八、『缶廬集』巻四所収）である。

花宜人醉醉宜歌、乘興來觴晋永和。

徑僻准尋閑草木、詩成愁对破山河。

天風裂石携琴到、雪影翻池趁鶴過。

何日南苔賦歸去、水邨煙塢一漁蓑。

〔花は人を酔わせ酔えば歌わせるようで、興に乗り觴めぐり来れば

蘭亭の宴のよう。

小道をそれて閑かなる草木を尋ねず、詩を作り愁いを国破れた山河に向けている。

空を吹く風が石を裂くかのような中に琴を携えて到れば、雪影が池にひるがえり鶴を追うように過る。

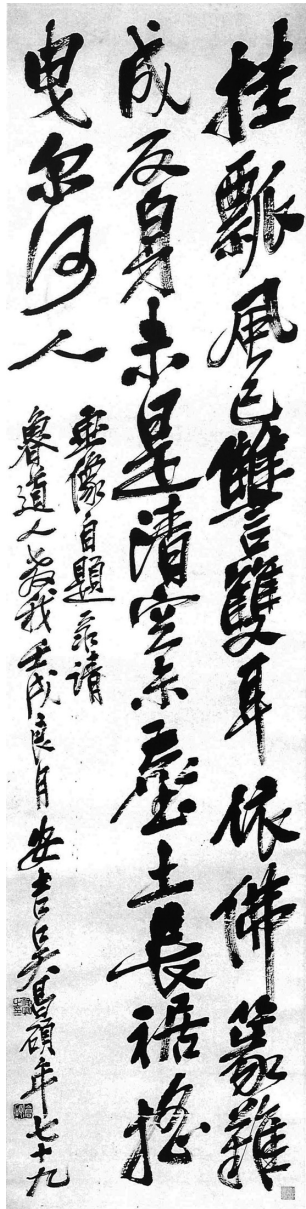
いつの日か歸去來の辞を賦して故郷の南苔に帰り、水辺の霞なびく村の一漁夫になりたいものだ。〕

この詩は、「晨風廬唱和集團」の成員であつた姚文棟（号は東木）が、三月三日（旧曆）の上巳節、上海の徐園で、東晋の王羲之が永和九年（三五三）の同日に催した蘭亭の宴になぞらえた修禊の宴を開いた際に作られたものである。もとより周夢坡も招かれており、「上巳、姚東木約至徐園修禊、迨後貽書云、投詩已有百数十章、惟無五絶、漫擬十章以応之」詩（『夢坡詩存』巻七所収）を作っている。その割注に、是日、仮徐氏双清別墅修禊、到者近二百人。

（姚文棟）は、この日、徐氏双清別墅（徐園の中にあつた別荘）を借りて修禊の宴を開いたが、やって来た者は二百人に近かつた。〕

とあり、宴の規模が窺える。この席上、呉昌碩は、魯道人の詩に和してこの詩を作っているのであるが、魯道人の詩は確認し得ない。

また、壬戌（一九二二）には、「画像自題詩」を行書で書き与えてい



挂瓢風已響双耳、依仏篆難成反身。  
未是清空未塵土、長裾搖曳爾何人。

画像自題泉請魯道人教我。壬戌良月、安吉吳昌碩、年七十九。

〔瓢を掛けても風はすでに双耳に仇をなし、仏に帰依しても篆はわが身を省みるものになりたい。〕

清空でもないが塵土でもない、長い裾を揺らしながらひきずついて  
いるお前は何者なのか。

自画像に自ら題した詩を録して魯道人に私に教えてくれるよう請  
う。壬戌良月（旧暦十月）、安吉の吳昌碩、年は七十九。」

自画像に題した、自身をさらけ出した詩を書いて贈っていることが  
らも、魯道人との交流の深さが窺える。

そして、甲子（一九二四）には、「魯山索詩賦贈」詩を作り、与えて  
いる。

蹴踏洪荒響足音、不扶繩往路軀歛。

酒多才処頌声作、文入古時騷意深。

烝罇嘉魚濠上樂、倦游野馬沢中吟。

遼東故土婦何日、老屋西風漑釜鬻。

〔太古の時代を闊歩して足音を響かせ、繩の助けを借りずに往く路  
は険しい山道である。〕

酒は才あるところを多くして歌声をおこさせ、文は古の時代に入  
り多感で詩意が深い。

尾を揺らして群游するよき魚は濠上で楽しみ、旅に疲れた野の馬  
は沢中で吟じる。

遼東の故郷に帰れるのはいつの日か、老屋に吹く西風が釜鬻にそ  
そがれている。〕

これは、吳昌碩が魯道人について詠じた貴重な詩である。前出のよ  
うに、魯道人は襄平の人であり、襄平は遼東にある。遼東から遠く離  
れた上海に流寓し、苦勞しつつも、詩文で身を立てている魯道人を温  
かく見つめた内容となっている。「魯道人重定詩文潤格」も、このよう

な思いをもって定められたのであろう。

## おわりに

吳昌碩は、詩人として加わっていた周夢坡の「晨風廬唱和集團」で  
魯道人と出会った。そして、魯道人と交わるうち、心を通わせ、「魯道  
人重定詩文潤格」を定めることになった。書画篆刻家として評価され  
る吳昌碩であるが、ここでは詩人として、魯道人を応援しようとした  
のであろう。もとより、芸苑に名を馳せていた吳昌碩による潤格は、  
大いなる効果をもたらしたに違いない。

吳昌碩の葬儀に参列した人物を、一九二七年十二月二日付『申報』が  
報じており、その中に魯道人の名も見える。<sup>〔注7〕</sup>一九一六年に出会ったと  
思われる二人は、吳昌碩の逝去に到るまで、親しく交際したのであ  
う。本稿で、そういった人物を発掘できたことにも些かの意義はあ  
たのではないか。

〔注1〕 拙稿「吳昌碩が定めた潤格について」（一九九八・『書論』三十号・  
書論編集室 初出／拙著『吳昌碩研究』・二〇〇九・研文出版（収載）  
参照。

〔注2〕 『雅昌芸術網』「光緒庚子年魯道人提詩老照片」2010.1.31UP http:  
//bbs.arttronet/viewthread.php?tid=1747994 2010/12/02（プリン  
アウトの日付）

〔注3〕 拙稿「吳昌碩と周夢坡―近代中国文人交流の一形態―」（二〇〇六・  
『書論』三十五号・書論編集室 初出／拙著『吳昌碩研究』・二〇〇九・  
研文出版（収載）参照。なお、「晨風廬唱和集團」というネーミングは、  
胡曉明主編『近代上海詩学系年初編』（二〇〇三・上海世紀出版集團、  
上海教育出版社）によってなされている。

〔注4〕 「上巳徐園和魯山」詩は、制作年代順に配列されている『缶廬詩』巻

八に収められており、丁巳（一九一七）の大晦日に作られた「丁巳除夕」詩と、戊午（一九一八）六月八日に作られた「戊午六月八日夢坡属題巖山先生遺像」詩の間にある。よって、戊午に作られていることがわかる。

〔注5〕 朱培爾主編『二十世紀書法経典・呉昌碩卷』（一九九六・河北教育出版社、広東教育出版社）所収。

〔注6〕 「魯山素詩賦贈」詩は、制作年代順に配列されている『缶廬集』巻五に収められており、甲子（一九二四）の元日に作られた「甲子元日書懷兼呈彊邨」詩と、乙丑（一九二五）の元日に作られた「乙丑元日」詩の間にある。よって、甲子に作られていることがわかる。

〔注7〕 篆社書法篆刻研究会、日本篆刻家協会『生誕百五十年記念呉昌碩作品集』（一九九四・篆社書法篆刻研究会、日本篆刻家協会）所収

